
恋チヨコ

Rei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋チヨコ

【Nコード】

N2935Q

【作者名】

Rei

【あらすじ】

花澤ルカは、何も変わらない毎日に退屈していた。

そんな彼女を変えたのが、彼と、そして…

一粒のチヨコレートだった。

まだ、友達だと思っていた。だけど、ルカの中で彼の存在は、確実に大きくなっていった……

チヨコレートから始まる、切ないラブストーリー。

「相合傘」byルカ（前書き）

初めまして。Reiと言います。

まだまだ小説初心者ですが、楽しんで読んでいただけたら嬉しいです。

感想もお願いします！

「相合傘」byルカ

全てはあの日から始まったんだ。

そう、全てはあの雨の日から。

君のことを「特別だ」と感じた日。

そして、私を変える元となった、あのチョコレート。

そう、チョコレートは恋の味だったんだ。

私、花澤ルイはいつも通りの朝を迎える。

天気は…晴れ。今日も傘は必要ない。

「…暇だなあ」

学校はある。友達もいる。

でも何だか、毎日が同じに見えて、飽きたとでもいうか…

「ルイ」

ポン、と肩を軽くたたいてきたのは…親友。瑞樹かなえ。

「おはよー！」

「相変わらず朝からテンション高すぎ!!」

私はそんな親友に突っ込みを入れてみた。かなえは、明るいし性格もいいし、

何より一緒にいると楽しい。

「…あ！ルイ」

「…な、何？」

ニヤニヤしだしたかなえは、私を指さす。

「優風君のこと考えてたでしょ！」

「はっつ！?!？」

優風君。学校でモテている男子だ。

でも私は別に好きだと思わないし、かつこいいとも思わない。

だから、

「ないないない！！絶対、絶対ない！！！！」
と全力拒否した。

「そ、そんなに否定しなくても……………あ」

かなえの表情が変わる。学校はもう目の前。でも、予鈴が……

「やつば————！！！」

私とかなえはあわてて教室へと向かった。

……ぎりぎりで間に合った。

キーン、コーン……………

授業の終わりを知らせる鐘が響く。

「やあっと終わった〜」

私がほつと落ち着いている時に、担任の先生が声を掛けてきた。

「花澤。ちよつとこの資料、図書室へ行って片づけておいてくれ」

とって机に置かれたのは……………大量の本。

「え、ええ、先生、こんなの一人じゃ無理ですよおお〜」

「そうか。じゃあ……………おい、西野。花澤の手伝いしてやってくれ

！」

西野？西野って……………

「はい」

そう言ってこっちに來たのが西野君。

「ゆ、優風君…？」

朝、かなえと話したからか、何だか反応してしまった。

気まずいよ先生！！まだ優風君と一回も話したことないのに……………！！

「じゃ、よろしく」

先生はそんな私の様子に気づかずに、そそくさとどこかへ行っ
てしまった。

「……………じゃ、行くか」

「……………うん」

資料をお互い半分ずつ持って、図書室へと向かう。

カラカラッ…

図書室には誰もいない。きつとみんなはもう帰ってしまっただろう。かなえは、バスケット部の試合があるとか言ってた。

「……………」

お互いに言葉を交わさずに、黙々と資料を片づける。

「…なあ」

沈黙を破ったのは、優風君だった。

「あんた…名前、なんていうの？」

「え…つと、花澤ルイ…だけど」

「そっか、花澤か…まあ、よろしくな」

「うん！」

なんだか嬉しくて、笑顔があふれた気がした。

そのまま私たちはいろんな話をして、資料を片付け終えた。

「うわっ…すごい雨だな」

さっきまであんなに晴れてたのに。今はどしゃぶりだった。

「どうしよ…傘持ってきてない…」

「俺、折り畳み傘持つてるから貸してやるよ」

「え、でも優風君が…」

「俺はいーよ」

優風君…優しいなあ。でも……

「じゃあさ、一緒に帰ろう！それなら優風君も濡れないし！」

「えっでも」

「いーから」

強引に優風君の腕を引っ張って、相合傘して帰った。

これが、全ての始まり。

私を狂わせるような、恋の始まりだったんだ。

「相合傘」by・ルカ（後書き）

どうでしたでしょうか。

ご感想をいただければ嬉しいです。

では、またよろしく願います！

「悲しい味」by ルカ（前書き）

第2話となりました。

1話を読んでくださり、ありがとうございました！
次第に切ないストーリーになっていくと思いますが、
皆様に楽しく読んでいただけたら嬉しいです。

「悲しい味」byルカ

あまりにも雨がひどくなってきたから、私と西野君は雨宿りすることにした。

そこは小さな公園。雨だから、子供はいない。

公園にある小さな屋根の下に、私たちは入った。

「あ…お母さんにメールしなきゃ」

お母さんは心配性だから、送れるってメールしないときっと大事になる。

「……これでよし…っと」

パタンとケータイを閉じて、雨が弱くなるのを待っていた。

西野君は、何も言わなかった。

「……」

今は6時半くらい。雨は一向に止まない。

私も西野君も、お互い言葉を交わさず、ただただ雨が止むのを待っていた。

その時。

…ぐるるる……

「…あ…っつ」

(ヤバ…恥ずかしいっ)

私のお腹が鳴った。今はもう夜だから、お腹はすぐ。

…でも、こんなタイミングで…私のお腹、KYっつ!!

私が顔を赤くしていると、となりから何か聞こえた。

「…ふっ…っくくく…」

「ちよつと、西野君！笑わないでっ!!」

「わりい。…腹、減ったの？」

私は恥ずかしかったけど、コク、と頷いた。

すると西野君は鞆から何かを取り出して……

「花澤。手、だして」

「？」

私は言われるままに手を差し出す。

…コロソ。

「えっ…？これって…」

私の手の平に置かれたのは、チョコレート。チロルチョコみたいなモノ。

「キャラメル味のチョコ。腹減ってんだろ？やるよ」

「えっ…いいの？…ていうか、なんでこんなの持ってるの？」

「俺、甘いもの大好きなんだあ」

そう言つて笑う西野君…その笑顔は、あまりにも無邪気で。

「ふふ、ありがとう」

私も笑い返した。そのままチョコを、口の中に入れる。

「……甘い」

キャラメルの味が口の中いっぱいに広がった。でも、

「！………苦い………」

後から出てきたビターチョコの味が、甘い味を消していった。

それが何だか、さみしく思えて。

「このチョコって………悲しい味」

「？悲しい味？何それ」

西野君が首をかしげる。私は我に返つてあわてて首を振る。

「！ううん、何でもないっごめん！」

気づけば、雨はもう止んでいた。

「雨、止んだな。…行くか」

「………うん」

もう…行くんだ。

なんだろう。もう少し、ここに居たかったよな気がする。

もう少しだけ、西野君と一緒に居たかったよな。

この気持ちは、なんなんだろう…？

「悲しい味」by ルカ（後書き）

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

ご感想をいただけたら嬉しいです！

では、これからもよろしくお願いします。

「友達」byルカ（前書き）

3話目となりました！

どうでしょうか？楽しく読んでいただけると嬉しいです。

楽しく読んでいただければ嬉しいです。

3話目も楽しく読んでいただけたら嬉しいです。

「友達」byルカ

帰りは、西野君が送ってくれた。

「送ってくよ」と言われた時、私は純粹に嬉しかった。

まだ一緒にいられるんだ、と思った。

「花澤の家どこ？」

「あ、えつとね……そこを左にまがってまっすぐ」

「了解」

だんだん家が近づいてくる……

もう少しだけ、話していたいな。

いつからかそんなことばかり考えるようになっていて……。

「着いたぞ」

「……え、……あ！あ、ありがとうっ」

西野君にペコッと頭を下げ、ほほ笑んだ。

「うん」

「じゃあ、また……」

私は家に入ろうとした……その瞬間。

「えっ？」

私の手は、西野君に握られていた。顔が熱くなっていくのがわかる。

「あのさ……明日の朝、一緒に学校に行ける？」

驚いてしまった。あの西野君が、私に「一緒に学校に行こう」なんて。

「もちろん」

自然にそう答えていた。口が勝手に動いていた。

西野君は嬉しそうな顔をして、ほほ笑んだ。

「良かった。じゃあ、明日の7時、ここに迎えに行くから」

「わかった。おやすみなさい！」

「ああ、おやすみ」

西野君は後ろを向いて、走っていく。その後ろ姿は、すぐに見えな

くなくなった。

「?メール?」

ケータイを開くと……かなえだった。

『今日、西野君と図書室にいたんでしょ? なんかあった?』

う………するどい。

『確かに一緒にはいたけど、特に何もなかったよ』

私はそう返した。

…今日はいろいろありすぎて、疲れたんだ。

かなえにはまた明日話せばいいし。

「…あれ…」

そういえば。

こんなに一日が楽しいなんて、今まで思ったこと無かったかも…。

いろいろあったから、楽しかったんだ。

そう、西野君のおかげ……

「ありがとう…西野君」

そつと私は呟いた。

西野君は、友達。

大切な、大切な友達。

この思いは、『友達として』なんだ。

そう、友達として、好きなだけだよ……

「友達」byルカ（後書き）

どうでしょう？

まだ、「切ない」とまではいきませんね。

次第に切なくなっていくと思います。

ご意見やご感想、お待ちしております！

「無邪気」by・優風

花澤を家まで送った後、俺はつい小走りになってしまった。なんなんだよ、あの無邪気な笑顔は。

つい、手を握っちゃったじゃねーか。

「……………って、何考えてるんだ俺は」
でも……………

どうしてあの時、手を握って……………

「明日、家に迎えに行く」

と言ってしまったんだろう。

花澤の、嬉しそうなあの無邪気な笑顔が頭に浮かぶ。でも、その答えはどうしても見つからなかった。

次の日……………

俺は約束通り、花澤の家へと向かった。

どこだったっけ……………

近くまで来たのに、どこだったかよく覚えていない。

「…やべー……………どうしょ」

このままでは、花澤を待たせてしまう。

俺は、あたりを見回してみる。

「……………あ、いた！花澤……………」

「花澤さん？」

花澤を見つけ、声をかけかけると……………

「え？あ、おはよう藤田君」

「おはよーっ」

……………誰だ？あの男は……………

見たことのない男が花澤に近寄っていた。

俺は知らないけど、花澤は知っているようだ。

「ねーね、花澤さん、今日俺と一緒に行かない？」

なんだよ、こいつ…俺が先に約束したんだぞ。

「ごめんね、今日は……」

「えーっなんで！？かなえちゃん待ち？ならかなえちゃんも一緒に」
「違うの！とにかく、今日はごめんね」

花澤は断っているが、あの藤田とかいう奴はしつこく粘ってくる。

「えーなんでさ？いいじゃん、行こうぜ」

花澤の肩に、手をまわした。

「……っ！」

気づけば、俺は花澤を藤田から離していた。

「西野君！？」

「…誰だよおまえ…」

藤田は明らかに不機嫌そうな顔をした後、急に笑顔に変わり、

「あ！もしかして…彼氏！？」

「え！？ち、ちが…」

花澤は否定する。だが、藤田は花澤の声が聞こえないかのように、

「そっか。わりー！じゃあ邪魔者の俺は先行くわ！じゃーね、花澤

さんと彼氏さん！」

と言って、走って行った。

「西野君…？」

「！わり、行こうか」

「うん！」

花澤はにっこりと笑った。

その時、俺ははつきり思った。

…花澤は、かわいい。

だから、藤田とかいう奴に花澤を触られた時、反射的に2人を引き
離していた。

触ってほしくない。

花澤の笑顔を、他の奴に見せてほしくない。

そう思ったんだと思う。

この思いは、友達としてなんだろうつか？
それとも……

「無邪気」by・優風（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。
感想をいただけたら嬉しいです。

「彼女になって」by・律

俺は、藤田律だ。花澤さんは、俺のことを「藤田君」と呼ぶ。その呼び方は、やめてほしい。

名前で呼んでほしい。

花澤さんの笑顔が好き。あの笑顔を、誰にも見せたくない。俺だけに、向けてほしい。

…花澤さんのことが、好きだから。

だから、あの西野とかいう奴が邪魔だった。

「…はっ…なんで逃げてんだよ、俺は」

気づいたら走っていた。学校へと向かっていた。

「俺のほうが先に、好きだったんだ」

そう、花澤ルカという少女に出会ったのは、俺がまだ6歳の頃。

近所に初めて、俺と同じ年の子が引越して来た日。

俺の近所には、年下か年上しかいなかった。だから、遊び相手がいなくて、

毎日退屈していたんだ。

そんなときに、花澤は引越してきた。同年の子が、近所に来た。それを聞いた俺は、すごくうれしかった。

それから俺とルカはすぐ仲良くなった。

毎日遊んで、笑いあって…そんな毎日が続いていた。いつからだろう。

そんな花澤さんのことを、俺は好きになっていったんだ。

「…さて、そろそろ伝えるとするか」

学校へと急いで、昼放課に花澤さんと待ち合わせることにした。この思いを、伝えるんだ。

…昼放課になつてしまった。

「いざとなると…やべえ！緊張する…」

呼びだした場所は図書館。昼放課は誰もいないから、図書館にした。
…カラカラッ…

「藤田君？どうしたの…？」

来た！

「……？花澤さん…？」

気のせいだろうか。朝見たときより、暗いというか…元気がない。

「！あ、ごめんね！何？」

「えつと…その、お、俺はっ……」

言いかけた。と、その時、あることに気付いた。

花澤さん、俺を見てない…？

どこを見てるんだろう。

そつと、花澤さんの見ている方向に目を向ける……

「！！」

見てしまった。あり得ない光景を。

そこは屋上。西野と、誰かわからない女が……

抱き合っている…？

「……………」

花澤さんが、声にならない悲鳴を漏らす。

ハツとなつて花澤さんを見る。花澤さんは……泣いていた。

泣いている？あの、いつも笑顔な花澤さんが……

そんな顔、似合わない。花澤さんに似合うのは、笑顔だ。

あいつのせいだ…

「つごめんね…藤田君…今は私を、見ないで…」

「……………」

俺は許せなかった。花澤さんを泣かせた西野が。

「！藤田く……」

「俺がいるから」

気づいた時には、俺は花澤さんを抱きしめていた。強く、強く、抱きしめていた。

「俺は花澤さんが好きだ」

花澤さんの体は、思っていたよりもずっと華奢で…愛おしく感じた。今、言うべきだ。

「俺の彼女になって」

「彼女になって」by 律（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます！
嬉しいです。

感想をお願いします！！

「もし…」byルカ

「俺の彼女になって」

え……？

何を、言っているの？

私は藤田君に抱きしめられたまま、考えを巡らせる。

「…ごめん。急にそんなこと言われても、困るよな……」

藤田君はそつと、私を解放した。

「返事は、今じゃなくてもいいから」

「藤田君……」

藤田君は急に笑顔になって、明るく言った。

「ずっと…待ってるから！じゃあ、それを言いたかっただけだから

！」

「あつ…うん、じゃあ、また明日ね」

「じゃな」

藤田君は明るく図書室から出ていった。

私はハツとなって外を…

屋上を、見た。

「いない……」

さっきまでいたはずの西野君と女の子がいなくなっていた。

「西野君……」

さっきのことを考えると、また涙が出てきそうだ。

どうして私は、さっき泣いたんだろう？

どうしてこんなに、胸が痛むの？

ああ、そうか……

「私は…西野君のことが……」

やっと気付いた。

この思いに。この気持ちに。

「…好きなんだ」

叶わなくなっただけでいい。私は、西野君を見ているだけで幸せなんだ。だから。

「…もし、藤田君と付き合って、私が藤田君のことを好きになっただけでいい。」

きつとそんなことは絶対ないだろう。

でも、こんな気持ちは、もう味わいたくない。

「こんな思い、もうしなくて済むのかな…。」

西野君のことを、忘れられるのかな。

恋がこんなに苦い味だなんて…思わなかったから。

だから、私は…

「もし…」「b y ・ルカ（後書き）

ありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2935q/>

恋チヨコ

2011年1月28日11時11分発行